

ファルーカスタッフが注目するヒト、モノ、アレコレ……

今回の旬
『萩原 淳子』

揺るぎない、自らへの信頼をもって

セビージャ在住の萩原淳子といえば、今、スペインでプロとして活躍する数少ない日本人バイラオーラの一人。昨年、ウブリケ市主催全国フラメンコ芸術コンクールにて準優勝するなど、本場スペインで踊り手として着実に地歩を固める萩原さんの素顔とは……。

躍進し続けている人というのは、周りには見えない、ある勢いの渦中にあるのかもしれない。大学のサークルで始めたフラメンコ。3年間の会社員生活を経て、2002年渡西。3年半の私費留学の後、05年からは文化庁の新進芸術家海外派遣研修員として2年間国費留学。その後もセビージャに滞在し、グラナダのペーニャ「ラ・パーラ・フラメンカ」において2007-2008年ペーニャ公演最優秀フラメンコ舞踊家賞を受賞、08年の「ピエナル・デ・アルテ・フラメンコ・セビージャ」併行プログラムでは、日本人として初のソロ公演に出演するなど、常にスペインに重心を置いて踊り続けてきた。誰にでもできることではない。

スペイン人の観客を前に、フラメンコを踊る。街中を歩けば、外国人に対する偏見や差別にも出くわす。もちろん、楽屋でだって。つらい、と思ったことはありませんか？と聞くと、いつも「ないです。好きなことだから」という鋼(はがね)のような、まっすぐな答えが返ってくる。「何がラクとか、厳しいとか、考えたことないです。もうこれで行く、と決めているので」。

とても頑張っている人。そう思う反面、萩原さんと話していると至極当たり前なことにも気付かされる。

スペインで感じた、外国人であることへの差別。「でも、本当に実力のあるアーティストなら、私が日本人だということだけで、そういう感情を抱かない。頑張れば、その人のアルテに対して応援してくれる」。「ストレス？ 日本にいても、会社員でもストレスありますよね」。

スペインでのコンクールにも精力的に挑戦する。タイトルの獲得は、踊り続けるのに有利だから？「コンクールの結果って一時的なものかもしれないですね。優勝したからといって、それがすぐに仕事に結びつくわけではありません。話題には上るので『本当のところはどうなんだ』って、実際にステージを観にきてそこで試されて、良ければ声がかかるようになります」。そうした「当たり前」を一つひとつ、スペインで積み重ねてきた。

萩原さんは現地で、ペーニャと呼ばれるフラメンコ愛好家の集まりによく呼ばれ、踊る。アンダルシアで300以上あるというペーニャは、会員が会費を払ってそれぞれのペーニャを運営しており、建物を借りたり、買い取ったりして各自のペーニャ会場を有している。自分たちで公演を企画し、アーティストを雇ってフラメンコを楽しむペーニャもあるというから、観客の層の厚さ、文化としての成熟度を実感する。

何よりも、カンテを聴いて踊るということを大事にしたい、という萩原さんは、舞台に立ち、教授活動が続ける中、学ぶ姿勢も忘れない。5月からは自ら振付けたタラントを携えて、ラファエル・カンパージョの個人レッスンに挑んでいる。振付けをもらうのではなく、自分の振付けを自分の踊りにしていくために、彼に見てもらおうのだという。

萩原さんの書くブログは饒舌で、面白い。フラメンコへのまっすぐな想いと、葛藤が、分かりやすい言葉で綴られている。

これから彼女がどこへ行こうとしているのか、どんな踊り手になっていくのか、私などには想像もつかない高みの舞台へ、いつか駆け上がっていきってしまうのである。

(取材・文／恒川彰子)



Photo by アントニオ・ベレス

Junko Hagiwara

1976年生まれ。中学時代は新体操部に所属。早稲田大学のサークル活動にてフラメンコを始める。95年よりAMI(鎌田厚子)氏に師事。2001年日本フラメンコ協会主催新人公演にて奨励賞を受賞。09年マルワ財団主催“CAF”フラメンコ舞踊コンクールにて準優勝。セビージャ滞在9年目。

7月に東京・中野にて少人数制クルシージョを開講予定(詳細はHP <http://www.layunko-flamenco.com/JA/>にて)